

廿一世紀への期待

葉 貫 磨 哉

『駒沢史学』の創刊号が発刊されたのは、昭和二八年正月であり、この年三月の卒業生は一名で、この方々の知恵と努力が実って初めて地理歴史学科歴史専攻の機関誌が誕生したのである。これまで駒沢大学の定期刊行物は紀要のほかは無く、図書館はこの『駒沢史学』を実費三〇〇部を買い上げて交換用とした。最初は年二回の刊行を目指した関係から、二号は二八年四月、三号は同年十一月、四号は二九年五月と続刊されたが、購読会員数の不足から会費が思うに任せず、続刊が非常に困難を極め、五号は三一年十一月に漸く上梓された。この印刷費用の不足を補うため、都内の裕福寺院を巡って寄付を仰ぐこととし、手分けして都内を往来した。従って年二回の刊行は不可能なため、年一冊の刊行に変更された。このようにして三七年の一〇周年号までは何とか続いたが、この後に一〇・一一号は合併号となった。この号は佐藤堅司先生追悼号となったが、論文数が多くて合併号を組んだのではなく、台所が不如意で刊行が遅延していたためである。従って合併号は四〇年三月の刊行で私の手元に如何なるわけかこの号だけが欠けている。一三号が四一年四月、一四号四二年四月と以後は順調な歩みを続け、また大学当局からの助成金によって刊行が続けられることは、機関誌担当の編集者にとっても、心置きなく業務に専念出来て誠にもって有難い極みであると思っている。これから廿一世紀に向けて、益々『駒沢史学』の充実を図り、教育研究の成果が続々と掲載されることを期待するものである。ちょうど今年歴史学科三〇周年記念の行事が、関係各位の努力で開催された。恰も台風の直撃を受け、窓に吹きつける風雨は歓談する卒業生の話題を奪う程であった。しかしながらこれ程の卒業生が参加して

くれたことは、未曾有の出来事で、大変に心強い思いをした。卒業生にはそれぞれ横の連絡を密にする同期会があり、それぞれ弥勒会・駒三四の会・三稜会などの同期の会があると聞くが、これらを超えて駒沢史学会に参集して下さることを、心から念願しているものであり、また年度ごとの同期会が続々と誕生して、駒沢史学会を下から支えて頂ければ不動の学会が生れることは間違いない所であり、またそうあって欲しいと冀うものである。